



Anne M. R. Agur, Arthur F. Dalley (原著) /
坂井建雄 (監訳) / 小林 靖, 小林直人, 市村浩一郎, 西井清雅 (訳)
『グラント解剖学図譜(第7版)』

〔評者〕 山梨大教授・解剖学 竹田 扇

現代解剖学の規範的アトラス—変わらないものと、進化するもの

人間は規範(norm, ノルム)を求める。自らの相対的位置を規範に照合して決めることで、落ち着き、安心できるからである。では、何が規範たりうるのか。現代はインターネットを使ったサイバースペースに情報が満ち溢れており、何を規範としたらよいのかを決めかねる時代である。そこでの情報は玉石混淆であり、かつ専門家や同好士の査読を経ないため多くは信頼できず、当然規範とはなり得ない。一方、それぞれの分野で数多の成書が用意されていると、規範とすべきものを選定する判断基準が問われる。このとき、長く版を重ね続けてきた教科書、参考書にはやはり規範たりうる理由がある。そこには伝統というたすきで受け継がれた、変わらない、確かな知識が存在するためである。

『グラント解剖学図譜 第7版』はまさにそのような、解剖学における規範的な知を求める者にとって好適なアトラスであると言える。1943年の初版以来、実に70年以上続いている名著であり、原書は既に13版を重ねている。本書の最大の特徴として、初版より続く実物の観察によって描かれた多くの図版があるが、そこには熟練の解剖学者の肉眼を通じて得られた視覚情報が見事に捨象、統合された構造物として描かれている。これらは初学者が実際に人体を解剖しながら学ぼうと、写真アトラスでは代

用のできない頼りがいのある案内役となるであろう。

他方、本書は創業の理念を押さえつつも積極的に新しい情報や視点を加えることで時代の医学教育の要請に応え進化しながら、守成にも成功している。各章の末尾に加えられている画像診断情報はまさにその代表例で、これらは臨床医学を未習の医学生にも、解剖学の知識が臨床の理解に必須のものであることを端的に提示する。さらには重要な構造や概念を、適切なモデル図を用いて説明し理解を助ける思想が、本書全体に貫かれている。それらは、臨床実習中の医学生が現場で得た医学知識を解剖学に立ち返り有機的に統合しようとする際にも、現役医師が卒後数年経って自分の専門領域以外の局所解剖学を俯瞰したいときにも便利である。

以上の理由から本書を、系統講義において若干羅列的にならざるを得ない知識に潤いを与え、肉眼解剖実習の現場でも局所の構造同定に役立ち、臨床解剖学的重要性を理解させる、という規範的かつ全方位的な解剖学アトラスとして、全ての医学生に薦めたい。本書の監訳がわが国の規範的な解剖学者によるものであるところも心強い。

● A4変/頁920 / 2016年1月/定価: 本体15,000円+税
[ISBN978-4-260-02086-2] 医学書院刊